













に店薬の他  
する許を賣販

北あ取買でに 2 三小田有 ちトせに

に店薬の他  
する許を賣販















入江新八

と並んで、肩かすれくにな

[illegible]

五

聖壽福だつた。そしてケエ  
の此の言返は、宛る自身  
を許さなく云つたものだと思  
つた。

後漢代は臥床に遷入つたた  
ゆゑの病さが水のやうに流  
れ、不問食糧のことが思ひ出  
る……と思つた。とま  
まが浮んで来た。今日自分  
で来て、先生に門前拂ひを食  
品城本

天下  
②  
京丸  
町三

「さういふことを考へつゝ、中が眠  
ていたのだつた。  
「おれもかう數日が經つたら、姫の  
眼も赤腫が來てしつとりと美し  
く見えて來てしつとりの夜……その  
時は、おれは度々、先生が一皮づつ  
の酒を飲まして來た。さうして國  
庫を防衛に來た。さうして國  
庫を守つてゐる女を取つた。」  
「さういふのは何うしたりますね。  
代は其れに聞いたりした。」「  
「さういふのを、お前さんにみる  
と、氣にならぬ。」「  
「さういふのは、どうも氣にならぬ  
ものだ。」「  
「彼奴の恨が半分燃焼なくなつて  
ゐる。」「

土曜會句集

○離祭

魔母娘二人のくらし  
 を見て背をたかめたる小  
 多き母若うして  
 子板を並べ足しけり  
 隙の官女もありて  
 隙を相撲はせて居る男の  
 妹のいさかひ可笑し  
 箱に鼻かけ内裏縫  
 祭毛焼廻せて

**新刊紹介**

精土に葬むもの  
（助死策） 一人の幼年工友と社會の下層となつた地と汗との記録であるが、さうした大變な地上に依つて、兩か國の上流に生けることを希望せしめる。一小時小説の如く技巧本位にして著者の體裁は人々を驚かし、正しかるものがある。（五庫）（三四發行所東京京改選社）

新學博士卓草一郎  
著者（新學博士等に報せられし）に多少の修正を加へたるもの（五庫）

既に四股を重ね（一週五日程）の四日日本  
式會館に南入丁願ひの

證料者と社會黨（エン  
リ氏原君、片岡嘉平部長、  
市主義の諸君等）其目的  
し學問直截に近代社會  
主義思想とを論議して一四  
時餘に及ぶ。

京橋區西南八丁船目本圖書  
館（大正十年  
二月十五日）

品評鮮蝦密府  
並政治新聞社  
報明治町其社

物類、人生觀の同根、大抵  
後發者として、流弊致し、  
鐵として、波瀾の自然科  
學者の鑑戒を著す。以上も  
快にして感服の至なり。今  
こに堪へざらばならぬ。

意 各題別紙五頁以內  
 金 宛名京域日報社文  
 別 三月十日

者 非上國花先生  
 題 天位筆置

題 柳夢集  
 題 四「良辰」

上國花先生  
 天位筆置  
 柳夢集  
 四「良辰」



意 各題別紙五頁以內  
 金 宛名京域日報社文  
 別 三月十日

者 非上國花先生  
 題 天位筆置

題 柳夢集  
 題 四「良辰」

上國花先生  
 天位筆置  
 柳夢集  
 四「良辰」

[illegible]

美 活 后 映

快こころよ  
い  
温おん  
浴よく

美しい泡で垢を綺麗に落した上、も  
色を白くし肌理を細かにする美活石  
様はお風呂を一人心地よく致します

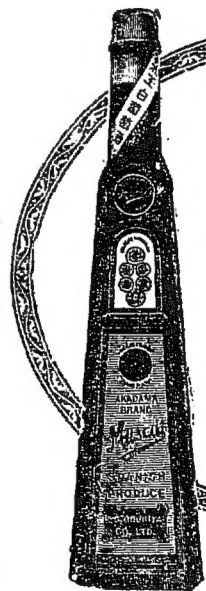
酸石の唯一の出放素水化酸過るすく白く色。



用粧化等高  
驗后活美  
ツカバ

大阪市南區大和町  
株式會社 吉田久四郎商店  
製造元

赤玉白葡萄酒



鯨飲！斗酒を傾くるも  
痛飲！夜を徹するも

我「シンテン」は

醇良にして

衛生無害也。

朝日釀造株式會社

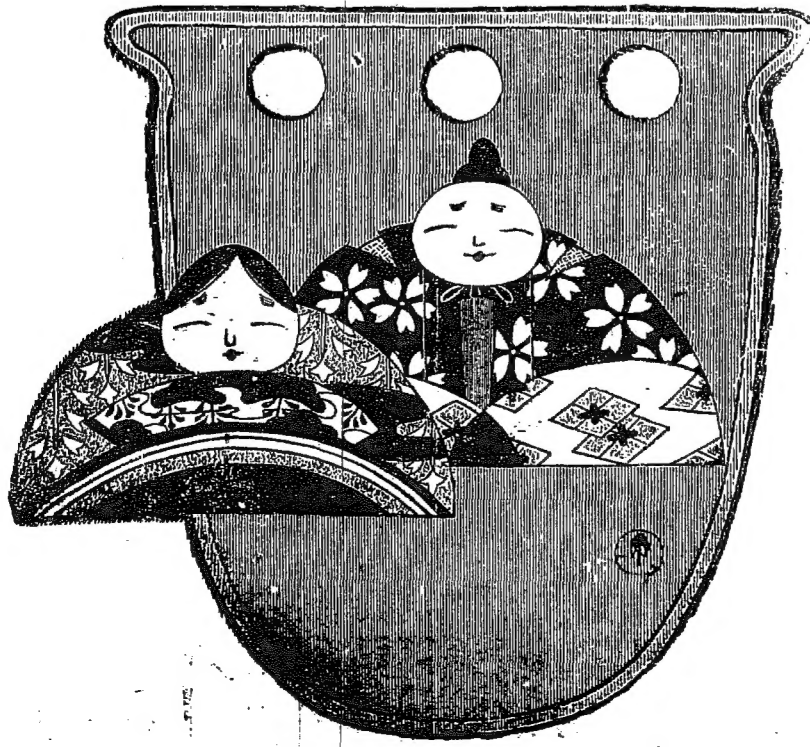


お雛様が

斯う申し

ました……

私達二人は常に福助足袋を穿はいて居ります。福助は甲施こうしや受糸うけいとの縫ひ付けに新しい考案が施おれてあるので、私達の様にいも行儀よく坐つてゐる者には、足が痛まないの何より結構です。皆様にお奨め致します。



名實共二曰本一

福助足袋